

神戸芸術工科大学における教養としての人文地理学の講義での取組み

EFFORTS IN LECTURE ON HUMAN GEOGRAPHY AS LIBERAL ARTS EDUCATION AT KOBE DESIGN UNIVERSITY

石原 肇 基礎教育センター 非常勤講師

Hajime ISHIHARA Center for Liberal Arts, Adjunct Lecturer

要旨

本稿は、芸術工学を専攻している学生に合わせた教養教育としての人文地理学の講義を目指した実践と今後の課題について報告することを目的とする。高校での地理の履修状況について把握したところ、全体的には履修している学生は少ない状況にある。このため、学生が人文地理学を体系的に理解することができるよう、テキストを使用することが必要であると考え。学生は自らが将来作成するであろう作品と人文地理学との間の関係性は希薄であると考えている場合が多い。一方、学生は自らが将来創作するであろう作品と風土との間の関係性はあるものと考えて者の数が増える。人文地理学と風土は同義ではない。しかし、人文地理学は風土を理解する学問の1つである。学生が人文地理学により強く関心を持つことができるよう、自らが将来創作するであろう作品と風土との関係にも触れて講義を展開する工夫が必要と考えられた。

Summary

This paper aims to report the practice aiming at the lecture of human geography as a liberal arts education tailored to students majored in art engineering and the future subjects. When I grasped the situation of the enrollment of geography in high school, overall there are few students taking course. For this reason, I think that it is necessary to use texts so that students can systematically understand human geography. Students often think that the relationship between works that they will create in the future and human geography is sparse. On the other hand, students increase the number of people who think that there is a relationship between future works and climates. Human geography and climate are not synonymous. However, human geography is one of the science to understand climate. It was thought that ingenuity that touches the relation with climate is necessary so that students can be strongly interested in human geography.

1. はじめに

神戸芸術工科大学(以下、本学という)のディプロマポリシーによれば、養成する人材像は、「科学と技術」「芸術と文化」「人間と歴史」の学問分野にまたがる「芸術工学」の基礎知識を身につけ、豊かなコミュニケーション能力と確かな表現技術の習得、感性の練磨に努め、常に時代の要請に鋭敏に反応し、社会との関わりの中で持続的に創造的な活動ができる人材を目指すとしている。また、本学のLEARNING GUIDE 2018では、基礎教育は、社会、文化、自然、技術、歴史、芸術などの基本的知識や技術を身につける教養科目群のほか、本学での学習に不可欠なデザインやアートの基本的技術を学習する科目などから構成されている。本学の人文地理学は基礎教育科目の「人間・歴史・社会」区分の科目の1つとして位置付けられている。

1991年の大学設置基準の大綱化の後に、村山(1996)によるお茶の水女子大学、林(1997)による名古屋大学、千葉(1997)による明治学院大学など、大学における教養教育での地理学のおかれた状況や教養教育としての地理学の意義などに関する論考がみられる。その後、松原(2009)は、慶応大学の教養課程における地理学の講義の位置付けとその中での自然地理学の意義を論じている。また、実践的なものとしては、川田(2000)による岡山大学での具体的な授業の改善と学生による評価に関する報告がみられる。同様に、安藤(2017)では京都大学における文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」と教養教育とを関連させた地域資源に係る地理学に止まらない展開の試みが報告されている。これらは、いずれも総合大学での論考や報告である。

他方、長谷川(2015)は、「ご当地グルメで風土(フード)を理解する」とした解説文の中で、一般社会の中で地理へのニーズが潜在的にあることを指摘し、テレビ番組での『ブラタモリ』(NHK)、クイズ番組の地理ネタ問題、ご当地グルメやご当地キャラなどを例示している。また、これらの一般社会の中で展開されている地理を含んだコンテンツを仕掛け、展開しているの

は、地理関係者以外の人ほとんどであるとしている(長谷川、2015)。このことについて、筆者は、中心市街地の活性化策としての食べ飲み歩きイベントであるバルイベントに着目して研究を進めており、バルイベントにはマップが不可欠であるが、このマップを作成しているのは地理関係者ではなく、デザイナーであることを知り、実感していた(石原、2016)。

筆者は、2017(平成29)年度と2018(平成30)年度の2か年にわたり、本学の人文地理学の講義を担当してきている。近年、高校での地理履修者は大幅に減少している。一方で、今後、高校での地理教育が必修化される予定である。本学は、全ての学生が芸術工学を専攻していることが特徴である。2017(平成29)年度の講義を通じて、将来学生は地理的要素を含んだ作品や製品を制作する可能性があると考えられた。後で詳述するように、学科によって地理的要素を含んだ作品や製品を制作する可能性は大小様々ではあるものと推測される。しかし、地域性のある作品や製品を制作する場合には、多かれ少なかれ対象となる地域のことを認識し、理解することが必要となるものと考えられる。このことを考えた時、一般的な用語としての「風土」を思い浮かべた。風土は、『大辞林』では「土地の状態。住民の慣習や文化に影響を及ぼす、その土地の気候・地形・地質など。」、『大辞泉』では「その土地の気候・地味・地勢などのありさま。人間の文化の形成などに影響を及ぼす精神的な環境。」とされている。地理学は、地球表層に生起するさまざまな事象について、総合的な研究に従事する科学とされており、その人文現象を扱うのが人文地理学である。風土は、本学の芸術工学を専攻する学生が少しでも人文地理学に関心をもって学ぶきっかけとなる概念ではないかと考えた。

先行研究に記したとおり、芸術工学を専攻している学生を対象とした教養教育としての人文地理学についての論考はみられない。そこで、本稿は、本学において芸術工学を専攻している学生を対象とする教養教育としての人文地理学の講義を目指した実践と今後の課題について報告することを目的とする。

2. 履修者の所属学科と高校における地理の履修状況

まず、2017年度と2018年度の人文地理学履修者の高校における地理の履修状況を学科別にみておこう。本学では芸術工学部の1学部で、同学部は環境デザイン学科(E)(以下、図表でE、以下同様)、プロダクト・インテリアデザイン学科(P)、ビジュアルデザイン学科(V)、映像表現学科(I)、まんが表現学科(M)、ファッションデザイン学科(F)、アート・クラフト学科(A)の7学科から構成されている。表1に2017年度の学科別・入学年度別の履修登録者数と参考として1学年の学科別入学定員を、表2に2018年度の履修登録者数を示す。

2017年度と2018年度ともに、7学科の学生が履修登録しており、2017年度では265名、2018年度では253名となっている。1学年の入学定員である400名と比較すると両年度ともに65%程度となっている。学年別にみると、両年度ともに、2年生の履修登録が最も多くなっている。学科別でみると、いずれの年度でも、環境デザイン学科(E)の学生が最も多く、ついでプロダクト・インテリアデザイン学科(P)、ビジュアルデザイン学科(V)、ファッションデザイン学科(F)の順となっている。これら4学科は他の3学科と比較して1学年の入学定員が多く、履修登録する割合も大きい傾向にある。高校での地理の履修状況について、2017年度を図1に、2018年度を図2にそれぞれ示す。2017年度は2回目の、2018年度は1回目の講義で、それぞれ小課題の1つとして高校での地理の履修状況を訊いている。全体的にみると、高校での地理の履修割合は、2017年度は約27%、2018年度は約37%と低い傾向にある。ただし、学科により差異がある。履修登録者の多い環境デザイン学科(E)やプロダクト・インテリアデザイン学科(P)の学生は高校で地理を履修したものの割合が大きい傾向にある。

3. 講義の概要と履修者に課す小課題およびレポート

つぎに、シラバスに沿って講義の概要を記す。人文地理学の授業目的・方針は、「本授業は、<地理学的な

	2015	2016	2017	計	定員
E	10	48	6	64	70
P	11	37	11	59	70
V	11	12	30	53	80
I	4	12	1	17	45
M	1	5	3	9	45
F	5	27	13	45	50
A	6	13	0	19	40
計	48	154	64	266	400

表1 2017年度の学科別・入学年度別履修登録者数(人)と1学年の入学定員(人)

	2015	2016	2017	2018	計
E	8	7	53	8	76
P	5	4	36	4	49
V	3	9	12	12	36
I	5	5	13	0	23
M	4	2	8	1	15
F	3	5	11	16	35
A	0	2	12	5	19
計	28	34	145	46	253

表2 2018年度の学科別・入学年度別履修登録者数(人)

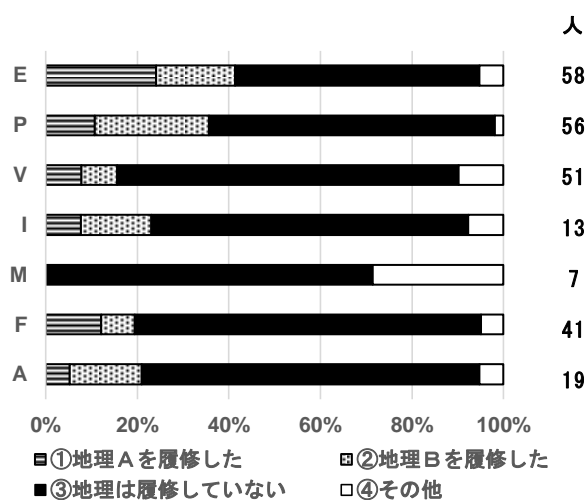


図1 2017年度履修者の高校での地理の履修状況

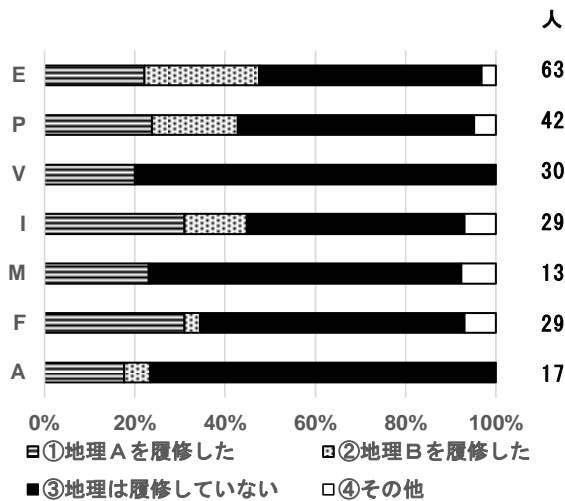


図2 2018年度履修者の高校での地理の履修状況

ものの見方・考え方>について幅広く解説するものである。この見方・考え方は、意識されていない場合も多いが、実は私たちの生活の様々なところに活用されている。もちろん建築やまちづくり、工業デザインなどとも密接な関係があるだろう。本授業では、教養としての地理学を学ぶとともに、身近な事象を新たな視点から捉えるきっかけを提供し、将来、個々の学生が専攻する分野でも活かせるものであることを解説する。」としている。

到達目標は、「<地理学的なものの見方・考え方>について理解し、それをを用いて身近な事象を捉えることができる。」ことに設定している。

この到達目標をふまえ、履修者が人文地理学を体系的に理解することができるようテキストを使用した¹⁾。テキストは奈良大学の稲垣稜先生著『現代社会の人文地理学』(古今書院)である。本書は稲垣先生ご自身が高校時代に地理を履修しておらず、そのことを意識して書かれたものであり、12章から構成されている(稲垣、2014)。このようなことから、本書は、人文地理学の初学者でも理解されやすい記述がなされており、また、地理学界で近年発表された研究成果が随所に織り込まれており、新鮮なトピックで説明がなされている点で履修者が学びやすいと考えられ、テキストとして適切であると判断した。

15回の授業内容は、表3に示すとおりで、12回はこのテキストの1章ずつを充て、残りの3回は、筆者

が独自に、1回目に「イントロダクション」を、10回目に「農業」を、15回目に「地理学をどんな場面で活かすか」を加えている。10回目の「農業」は、経済地理学的分野の中で工業や小売業、サービス業はあるものの、農業についてはなかったもので、加えている。1回目の「イントロダクション」は、筆者の自己紹介を兼ねて、これまでの実務経験²⁾を時系列で説明するとともに地理学との関連性についても説明し、人文地理学を学ぶ導入とした。15回目の「地理学をどんな場面で活かすか」では、2回目から14回目をふまえ、改めて筆者の実務経験を空間スケールの小さいものから大きいものの順で説明し、地理的なものの見方を解説した。くわえて、後述する小課題での履修者の現地調査の有無や将来作成するであろうアウトプット(作品やデザイン等)と風土が関係しそうかどうかに関する答えを集計し、地理的なものの見方との関連を解説している。

講義中に課す小課題について表4に、中間と期末のレポートのテーマについて表5に、それぞれ示す。講義中に課す小課題については、授業目的・方針に沿い、身近な事象を新たな視点から捉えるきっかけを提供すべく、履修者自身が住んでいるあるいは育った地域について問うことを多く課している。

回	テーマ
1	<u>イントロダクション</u>
2	人口①
3	都市②
4	郊外と大都市圏③
5	小売業④
6	サービス業⑤
7	観光⑥
8	交通⑦
9	工業⑧
10	<u>農業</u>
11	国土政策・都市政策⑨
12	エネルギー・資源問題⑩
13	地域調査⑪
14	地形図からみる人間生活⑫
15	<u>地理学をどんな場面で活かすか</u>

表3 各回の講義テーマ(2017年度・2018年度)

※テーマの後ろの○数字はテキストの章の番号

下線のあるテーマはテキストに無い事項

回	テーマ	回	テーマ
1	<p>Q 1 あなたは、高校時代に地理を履修しましたか？次の選択肢から選びなさい。 ①地理Aを履修した、②地理Bを履修した、③地理は履修していない、④その他（具体的に記述すること）</p> <p>Q 2 人文地理学は、皆さんが将来作成するであろうアウトプット（作品やデザイン等）と関係しそうですか？次の選択肢から選びなさい。 ①関係しそう、②関係しなさそう、③わからない</p>	9	<p>Q 1 工場はありますか？無い場合は、その旨を書くこと。</p> <p>Q 2 工場はどのぐらいの規模ですか？</p> <p>Q 3 一般論として工場は周辺にどのような影響を及ぼすと考えられるかを書くこと。</p>
2	<p>Q 1 住んでいる or 育った都道府県および市区町村の名前を記しなさい。</p> <p>Q 2 あなたの住んでいるところあるいは出身地の人口について、2015年から5年ずつ遡って、1970年まで記しなさい。（遡れない場合はわかる年まででよい）。</p>	10	<p>Q 1 身近なところで農業はありますか？無い場合は、その旨を書くこと。</p> <p>Q 2 あるとすれば、その農地の大きさは？農地は水田？畑？果樹？何が植えられている？無い場合は、その旨を書くこと。</p> <p>Q 3 農地が見当たらない人は、近くに公園はある？森林はある？</p>
3	<p>Q 1 自分の住む市（区）町村の名前と特徴は？</p> <p>Q 2 盛んな産業は？（ベッドタウンであれば、その旨を書くこと）</p> <p>Q 3 駅はいくつある？線名と駅名を書くこと。</p>	11	<p>Q 1 身近なところで市町村合併はあった？</p> <p>Q 2 身近なところで再開発はあった？</p> <p>Q 3 身近なところに景観が良いところがある？</p> <p>Q 4 身近なところに伝統的な建物がある？</p> <p>Q 5 政策という言葉を考えてことはある？</p>
4	<p>Q 1 自分の住んでいる（育った）府県にはニュータウンはある？あれば名前を書くこと</p> <p>Q 2 自分の住んでいる（育った）市（区）町村は総務省の大都市圏に属する？属したら大都市圏名をかくこと</p> <p>Q 3 自分の住んでいる（育った）市（区）町村は郊外に位置すると思う？</p>	12	<p>Q 1 家の電気料金・ガス料金はいくらかかっているか確認しましたか？金額は書く必要はありません。感想を書いてください。</p> <p>Q 2 家に車がある場合、燃料は何？</p> <p>Q 3 コンパクトシティって何ですか？</p> <p>Q 4 コンパクトシティは実現できると思いますか？</p>
5	<p>Q 1 自分の住んでいる（育った）ところの最寄駅には商店街はある？あれば名前を書くこと</p> <p>Q 2 同様に、百貨店、スーパー、ショッピングモールはある？あれば名前をかくこと</p> <p>Q 3 同様に、コンビニはある？あれば名前といつ頃からあるかを書くこと</p>	13	<p>Q 1 皆さんが専攻する学科では現地に出向いて調査することはありますか？</p> <p>Q 2 皆さんが専攻する学科でのアウトプット（作品やデザイン等）はどのような媒体で表現されますか？</p> <p>Q 3 皆さんが将来作成するであろうアウトプット（作品やデザイン等）には風土が関係しそうですか？</p>
6	<p>Q テキストの表5-1にあるサービス業で、自分が実際にサービスを受けている業種はあるか？個人サービス業消費関連、個人サービス業余暇関連、事業所サービス業、オフィスサービス業、公共サービス業の分類ごとに、あれば業種名を書くこと</p>	14	<p>Q 1 身近に使う地図はどんな地図がありますか？</p> <p>Q 2 国土地理院が発行している地形図は知っていますか？</p> <p>Q 3 配布した25,000分の1地形図は、皆さんが学ぶ神戸芸術工科大学の付近を示しています。配布した25,000分の1地形図に記してある凡例をよく見て、神戸芸術工科大学の付近について、特徴的と思われることを読み取り記述してください。</p>
7	<p>Q 自分の育った市の名称を書いた上で、テキストの表6-1にある観光資源はあるか？自然資源、人文資源Ⅰ、人文資源Ⅱの分類ごとに、あれば具体名を書くこと。無い場合は、その旨を書くこと。</p>	15	<p>Q 1 15回を通じての人文地理学の講義の感想を記してください。</p> <p>Q 2 人文地理学で必要と考えられる事項を一通り講義してきましたが、こういった事項も講義に入れるべきというものがあれば記してください。無い場合は、「無し」と記してください。</p> <p>Q 3 本講義では、レポートと講義での小課題により総合評価を行うこととしましたが、この評価方法が良いか、期末試験による評価方法が良いか、どちらが良いか記してください。</p>
8	<p>Q 1 大学までの通学で乗る公共交通手段と会社名を全て書くこと。</p> <p>Q 2 コミュニティバスがあるか？あれば、その名称と運行者名を書くこと。無い場合は、その旨を書くこと。</p> <p>Q 3 仮に公共交通手段が無くなった場合、どのような影響が出ると考えられるかを書くこと。</p>		

表4 各回の小課題（2018年度）

※2017年度は1回目に小課題を課しておらず、2回目の小課題において高校での地理の履修状況を尋ねた。

中間レポートは、10回目までの講義内容と小課題をふまえ、テーマを「自分の住んでいる(育った)市区町村はこんなところ!」とした。また、レポート作成のスタンスを「〇〇市の広報マン」と明示した。これは、単に自身の住んでいる、あるいは育った地域を記述するのではなく、将来専門性を活かした職業に就いた場合を想定してアウトプットを求めたことによる。

期末レポートのテーマは、「文化産業や芸術と地域」とした。中間レポートが、履修者にとって身近な地域を題材に「〇〇市の広報マン」になって作成してもらい、地元をPRするためには、地域をよく知るといふことの基礎を身につけることをねらいとしたのに対し、期末レポートでは、基礎をふまえた上での応用をめざし、履修者各自が専攻する分野あるいは将来就きたい仕事や実践していきたい活動などを念頭に、任意の地域を選び、その地域を調べ、レポートを作成することとしている。レポート作成のスタンスは、各自の関心のある分野・地域を調査し、それを自分の糧にするよう指示している。

評価方法は、授業中に課す小課題(40%)、中間レポート(30%)、期末レポート(30%)としている。シラバスにも、各回に出題する小課題のヒントを前の回に提示するので調べておくこと、中間レポートと期末レポートは一定の期間を設けて出題することを明記している。

4. 履修者の講義受講開始時の人文地理学に関する印象

2017年度の講義での筆者自身の経験や後述する履修者の風土に関する認識をふまえ、2018年度は、1回目の講義では履修者に高校での地理の履修状況を訊くとともに、履修者が将来作成するであろうアウトプット(作品やデザイン等)と人文地理学とが関係しそうかどうかを「①関係しそう」、「②関係しなさそう」、「③わからない」の三者択一で尋ねている。この回答の集計を図3に示す。学科により、大きな差異があることがわかる。環境デザイン学科(E)で「①関係しそう」の回答が約76%となっている。ついで、プロダクト・インテリアデザイン学科(P)で「①関係しそう」の回答が約57%となっている。一方、

回	テーマ
1	テーマ：自分の住んでいる(育った)市区町村はこんなところ！ レポート作成のスタンス：〇〇市の広報マン レポートに書き込む内容：テキスト1～8章+農業+PR
2	テーマ：文化産業や芸術と地域 レポート作成のスタンス：各自の関心のある分野・地域を調査し、自分の糧にする。 レポートの題目： 各自で内容に応じて、本文に入る前に必ず書くこと。 例「〇〇県〇〇市における△△産業の特徴」 レポートの内容： ○配布した以下の参考文献を読んでください。 ○この参考文献では、文化産業が産出する製品として、衣服・装飾品・化粧品、絹織物、帽子、絨毯、食、娯楽、アニメ、映画、音楽、映画・アニメ・TV番組、ゲーム、書籍があげられています。その上で、地域との関連が述べられています。 ○各自が専攻する分野あるいは将来みなさんが就きたい仕事や実践していきたい活動などを念頭に、 <u>いずれかの製品</u> を選び、その製品に応じて参考文献で示されているような <u>地域</u> (東京の渋谷や原宿、大阪の堀江、岡山県倉敷市児島地区など)を選び、 <u>その地域の①概要、②成り立ち、③特色などを記述</u> してください。 ○なお、参考文献は文化産業を示していますが、芸術と密接に関連した地域もあります。いわゆる「 <u>アートを活かしたまちづくり</u> 」で、これらも対象として結構です。 ※参考文献 立見淳哉「文化産業」(藤塚吉浩・高柳長直編著『図説 日本の都市問題』(2016年、古今書院に所収))

表5 レポートのテーマ(2017年度・2018年度)

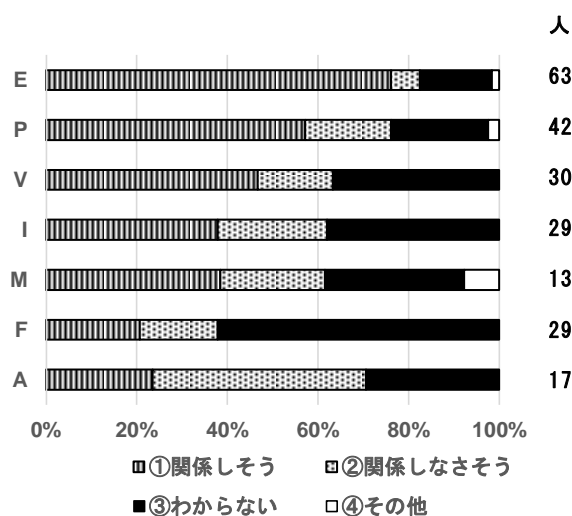


図3 2018(平成30)年度履修者の人文地理学と自身の専攻の関係性に関する認識

ファッションデザイン学科 (F) やアート・クラフト学科 (A) での「①関係しそう」の回答は 20%強に止まっている。

5. 履修者の現地調査実施の可能性

講義の 13 回目は、「地域調査」について解説している。この際の小課題は 3 つあり、そのうちの 1 つでは、履修者が専攻する学科では現地に出向いて調査することがあるかどうかを訊いている。履修者の回答を学科別に集計し、2017 年度を図 4 に、2018 年度を図 5 にそれぞれ示した。

両年度ともに、現地に出向いて調査するかどうかの回答は学科により差異があり、その傾向は類似している。環境デザイン学科 (E) とまんが表現学科 (M)

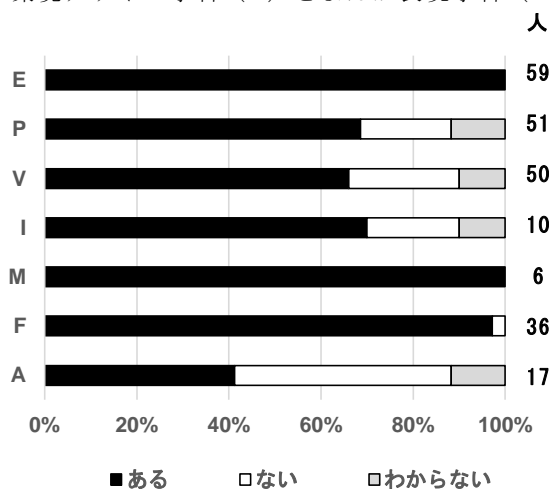


図 4 2017 (平成 29) 年度履修者の専攻における現地調査の機会の有無

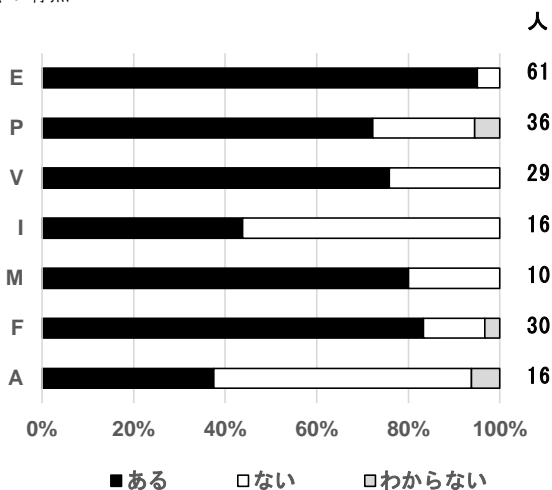


図 5 2018 (平成 30) 年度履修者の専攻における現地調査の機会の有無

では 2017 年度の全ての回答が「ある」となっている。

2018 年度においても環境デザイン学科 (E) は「ある」の回答がほとんどであり、まんが表現学科 (M) も 80%が「ある」と回答している。ファッションデザイン学科 (F) も両年度ともに「ある」という回答が多くを占めている。2017 年度についてみると、残る映像表現学科 (I)、プロダクト・インテリアデザイン学科 (P)、ビジュアルデザイン学科 (V) の 3 学科も「ある」の回答が 60~70%である。2018 年度についてみると、プロダクト・インテリアデザイン学科 (P)、ビジュアルデザイン学科 (V) の 2 学科では「ある」の回答が 70%を超えている一方、映像表現学科 (I) は約 44%となっている。アート・クラフト学科 (A) は、いずれの年度も約 40%程度となっており、最も低い値となっている。

このように、現地に出向いて調査する機会がほぼあると考えられる環境デザイン学科 (E) から比較的その機会はずりとは言い難いアート・クラフト学科 (A) まで幅があるものと考えられた。また、学科によって、地域調査の質的な差異もあるものと推察される。

6. 履修者自身の作品と風土との関係性の認識

13 回目の講義の小課題では、前章の現地調査の有無の他に、履修者が専攻する学科での作品やデザイン等のアウトプットはどのような媒体で表現されるかと、履修者が将来作成するであろう作品やデザイン等のアウトプットには風土が関係しそうかを訊いている。

履修者が専攻する学科での作品やデザイン等のアウトプットはどのような媒体で表現されるかの回答について表 6 にまとめている。履修者の作品やデザイン等のアウトプットの媒体は、極めて多様であり、学科によって異なり幅がある。このことが、当然のことながら、前章の現地調査実施の有無とも関連してくるようになると思われる。

つぎに、履修者が将来作成するであろう作品やデザイン等のアウトプットには風土が関係しそうかについての回答を学科別に集計し、2017 年度を図 6 に、2018 年度を図 7 にそれぞれ示した。両年度ともに、将来作成するである

学科	媒体
E	模型、図面、スケッチ、ポートフォリオ、プレゼンシート
P	既存の物、自然物、模型、データ、3D、木材、紙、布、金属、プラスチック、シリコン、インターネット、SNS、車、商品、作品展、新聞、写真、絵、家具
V	広告、ポスター、書籍パッケージ、WEB サイト、電子書籍、グッズ、イラスト、空間デザイン、紙で描ける物
I	映像、CG
M	紙、電子媒体
F	布、紙、衣服、ファッションショー、展示会、アクセサリ、美術館、雑誌、デザイン画、映像、素材、糸、PC データ
A	ガラス、絵の具、粘土、金属、紙、布、さまざま

表6 履修者の将来のアウトプット (2017年度・2018年度)

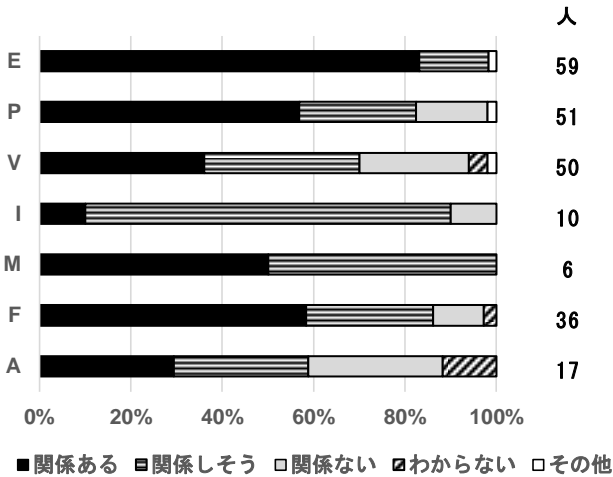


図6 2017(平成29)年度履修者の自身の作品と風土との関係性に関する認識

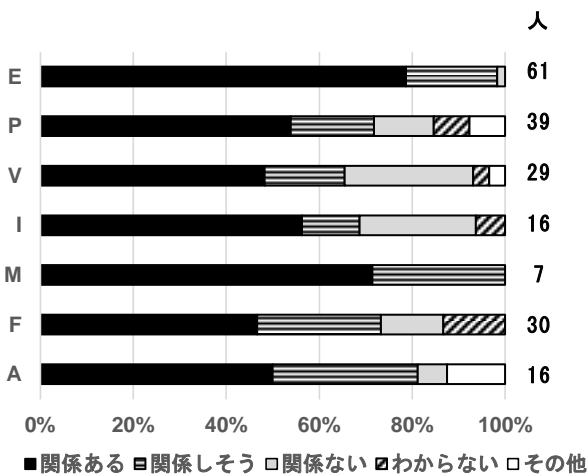


図7 2018(平成30)年度履修者の自身の作品と風土との関係性に関する認識

う作品やデザイン等のアウトプットには風土が関係しそうかについての回答は学科により差異があり、その傾向は一部の学科を除き類似している。環境デザイン学科(E)では2017年度と2018年度のいずれにおいても「関係する」が8割前後となり、残りも「関係しそう」が多く、この2つでほとんどを占めている。まんが表現学科(M)においても、2017年度と2018年度とでは、それぞれの占める割合に差異はあるが、「関係する」と「関係しそう」のいずれかの回答となっている。他の学科についてみると、2017年度のアート・クラフト学科(A)が59%であることを除き、2017年度と2018年度のいずれもで、「関係する」と「関係しそう」との回答が60%を超えている。一方で、「関係しなさそう」の回答も一定程度ある。これらは、表6に示した履修者の将来のアウトプットによって、そもそも大きく関係する場合とそうでない場合が想定されること、履修者自らが将来アウトプットする際に風土を意識しようとしている場合と全く意識しない場合があること、作品や製品の依頼者が風土をどのように考えて依頼するかによることなど様々な要因が履修者の回答の記述から推察される。

ここで、4章で記した履修者の講義受講開始時の人文地理学に関する印象と、履修者の自身の作品と風土との関係性に関する認識とを比較してみたい。先に記したように、2018年度の1回目講義で、履修者の講義受講開始時の人文地理学に関する印象を尋ねたのは、2017年度の13回目の講義で訊いた回答である図5や図6、表6から、風土という概念であれば芸術工学を専攻する学生にとって、より多くの学生が自身に関係するあるいは関係しそうと思っていることがわかり、履修者が人文地理学との関係性を訊かれた場合に、どのような認識を示すかを把握しておくべきと考えたからである。図3と図7を比較すると、学科ごとに似たような回答となっているが、風土という概念であると、自身の作品と「関係する」あるいは「関係しそう」とより強く認識する傾向にあると考えられる。必ずしも「人文地理学=風土を知ること」ではない³⁾。ただし、人文地理学が風土を理解しようとする学問の1つであるとは考えられる。風土という概念が、自身の作品と「関係

する」あるいは「関係しそう」と認識する履修者が多いことは、今は「関係ない」と思っている履修者にとっても、いつか「関係する」可能性があるとも考えられることから、芸術工学を専攻する学生が人文地理学の講義を通じて地理学的なものの方・考え方について幅広く知っておくことは、教養として備えておくべきことではないだろうか。

7. 今後の課題

本稿では、2017(平成29)年度と2018(平成30)年度の2か年にわたり、本学の人文地理学の講義を筆者が担当し、その講義の中で実施する小課題の履修者の回答に基づき、芸術工学を専攻する学生にとって人文地理学に関する印象や専攻する分野による地域調査実施の有無、将来のアウトプットと風土との関係性の認識などについてみてきた。その結果、いずれについても芸術工学を専攻する学生にとって所属する学科によって差異はあるものの、アウトプットが何かによるものの、現地調査を行う場合が多いこと、アウトプットと人文地理学との関係性より風土との関係性を強く認識している傾向にあるものと考えられた。

ここで、2017年度に本学教務課によって実施された授業アンケートの履修者の自由記述に簡単に触れておきたい⁴⁾。授業に関する良かった点について、「課題がわかりやすかった。」、「資料がわかりやすかった。」、「説明は実際にぴったり合う。」「課題について熱心に考えてくれていたようで大変良かったと思います。」「今まで詳しく調べることもなかった、自分の住んでいる地域を調べ理解することができてよかった。」などが記述されている。一方、授業で改善を求めたい点については、「教科書の文を読み上げるだけの部分があったのであまり興味が持てなかった。」、「授業が終わりかけの今、授業の目標がわからない。」、「授業の内容は興味ありましたが、先生の伝え方になれなくてよくわかりませんでした。」、「画像の解像度が不鮮明でわかりづらかったです。」、「資料の画質がもう少し良ければもっと良かったと思う。」などが記述されている。

履修者が人文地理学に関心を持っているのにも関わら

ず、関心を失わせてしまうことは極力避けなければならない。2018年度の講義においては、改善を求められた点について、スクリーンに映写する画像の解像度や配布資料の鮮明度を高めることに努めるとともに、講義でのテキストを補足する部分の説明を厚くし、テキストの内容の理解がより一層深まるように解説した。なお、講義の各回で課す小課題や2回のレポートは2017年度と同様に行っている。また、講義内容も2017年度と同様にテキストに沿ったものとしている。これは、高校で地理を履修していない受講者も含め、無理なく体系的に人文地理学の理解が進むようにすることが必要との考えからである。

また、芸術工学を専攻する学生が人文地理学により関心をもってもらえるよう、さらなる工夫をして講義を展開していくが必要であろう。そのためには、引き続き履修者が自身の身近な地域を調べることを継続しつつ、履修者の自身の将来のアウトプットと風土との関係性との意識に着目して講義を展開し、レポートのテーマを設定することで、履修者がより強い関心をもって調査あるいは考察する機会となるようにしていくことも検討すべき課題であると考える。

これらの改善や工夫を継続していくことで、履修者が、教養科目でありながら、人文地理学により強く関心を持ってもらえ、将来何かの機会に役立つことになれば、基礎教育の役割を果たす上でより大きく貢献するものと考えられる。

謝辞

神戸芸術工科大学で人文地理学の講義を担当する機会を与えていただいた齊木崇人学長、今村文彦学部長に感謝を申し上げます。また、今村文彦学部長をはじめとした基礎教育センターの田原知世元実習助手(2017年度)、中島歩実実習助手(2018年度)、同事務室の川戸みなみ氏、藤本真奈美氏、寺尾幸子氏の皆様のご協力・ご支援により講義を無事進められたことにお礼を申し上げます。本稿は、匿名の2名の査読者による懇切丁寧な査読により、大幅に改善された。記して感謝を申し上げます。

注

1)地理学は、大きく分けて系統地理学と地誌学に分けられる。系統地理学はさらに自然地理学と人文地理学に分けられる。自然地理学は地形学、気候学、水文学、植生地理学、土壌地理学に、人文地理学は文化地理学、社会地理学、経済地理学、政治地理学、歴史地理学とそれぞれ

れさらに細分化される。社会地理学や経済地理学は、さらに細分化される。「人文地理学」という科目名称の教養教育としての観点から、偏ることなく前記の各分野を網羅し、体系的に講義することは不可欠と考える。

2)筆者は大学院修士課程を修了後、地方自治体で25年間勤務を経て、2015年4月から現任校に勤務している。大学院修士課程では環境科学を専攻し、農学の一分野である土壌学の研究室に所属したことから、地方自治体にも農学職で採用された。地方自治体での自らの職務の対象が多様化する中、体系的に自身の仕事を整理したいと考え、大学院博士課程で地理学を専攻した。地方自治体での実務では、環境、農業振興、災害対策の分野で条例の改正や事業の創設・執行などに携わった。これらの実務は、本学の芸術工学と異質のものではあるが、制度を設計するという点で創造的であり、本質的には類似しているのではないかと思う。また、これらの実務と地理学とは直接的には結びつかない。しかし、より良い制度を構築するためには、地域の適切な状況の把握が前提であり、そのためには地理学的な地域の認識は有用である(石原、2014)。本務校では、環境政策論や環境アセスメントといった専門科目を担当しており、地理学そのものの講義は担当していないが、政策を構築する、あるいは環境アセスメントを実施する上で、適切な環境の把握が重要であることを講義で強調している。

3)例えば、吉野(1987)、福岡(1990)、市川(1990)、大嶽(1992)など、多くの論考がみられる。

4)2018年度も教務課により2018年7月16日に授業アンケートが実施されている。しかし、本稿執筆時点では集約中であるため、本稿には反映できない。

引用文献

- 安藤哲郎 2017、教養教育における地域資源を考える旅の創造 京都大学 COC 科目での取組、歴史地理学 59(1) : 19-32
- 石原肇 2014、地方自治体はフィールドワークができる人材を求めている?、地理 59(8) : 37-45
- 石原肇 2016、伊丹まちなかバルにみるガイドマップの変遷、地域活性学会研究大会論文集 8 : 355-358
- 市川健夫 1991、自然と風土に根ざした地理学、地理 36(5) : 64-73
- 稲垣稜 2014、『現代社会の人文地理学』、古今書院
- 大嶽幸彦 1992、風土と風景概念に関する地理学的アプローチ、上越教育大学研究紀要 11(2) : 275-282
- 川田力 2000、一般教養科目「社会と空間の地理学」の授業改善と学生による授業評価、岡山大学教育学部研究集録 113 : 59-67
- 千葉立也 1997、大学教養教育における地理学、地學雑誌 106(6) : 799-802
- 長谷川直子 2015、ご当地グルメで風土(フード)を理解する(1)地理的視点とご当地グルメ:連載にあたって、地理

60(5) : 7-13

林上 1997、大学における教養としての地理学教育、地學雑誌 106(6) : 794-798

福岡義隆 1990、地球環境時代の地理学-1-風土論からの視点 地理学と環境問題とのかかわり、地理 35(1) : 16-20

松原彰子 2009、大学教養教育における自然地理学の意義、E-journal GEO 3(2) : 33-38

村山朝子 1996、大学における教養教育を考える : 教養の地理学の可能性、お茶の水地理 37 : 1-10

吉野正敏 1987、三沢勝衛 その史的考察、地理 32(10) : 28-38

補遺

本稿査読期間に2018年度に教務課が実施した授業アンケートの結果が通知された。2017年度と比較して2018年度は、学生からの評価が、わずかながらではあるものの全般的に向上していたことを付記する。